![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\ame[1].jpg]()『蒼空時雨』

綾崎隼　（メディアワークス文庫）

雨宿りをお願いする彼女の真意とはなにか。ひょんな場面からこの話は進むのだが、

彼女の過去を知る内にすんなり納得できたから不思議だ。
一話ごとに視点が変わって登場人物の恋愛をそれぞれ読める上、

彼ら彼女らがどこかで繋がっていて面白い。しんみりした雰囲気のなか、

笑いに導く「零央」の存在が印象深く、彼ほど残念な人間はそういないだろう。

しかし、だからこそ好感を持ちやすいと思える人も多いのではないか。
もう大人な彼らだが、青春を感じさせるこの雨物語は最高に好みで、ときに悲しく、感動した。

![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\31163517[1].jpg]()

『回転ドアは、順番に』

穂村弘・東直子（ちくま文庫）

「順番」というものに、こんなにひかれるなんて！

『回転ドアは、順番に』は、ふたりの作者が短歌で形づくる女と男の物語。

読む前は大人しい文字たち（短歌たち）だけれど、ひとたび私たちが読むと、

紙からびぃんと抜け出して、私たちの目へ耳へ脳へそして心に飛びこんでくる。

その衝撃といったら！ 短歌と散文でできているので、いつでも好きなところを開いて、

ふたりの世界にひたることができます。解説までたっぷり楽しめる一冊です。

![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\1102983586[1].jpg]()『折れた竜骨』

米澤穂信　（東京創元社）

日常の謎を描くことが多かった筆者。しかしこの作品ではその世界観ではなく、

もっと大きなものをテーマに執筆している。テーマとは、魔術の存在が疑われなかった時代に、

探偵や推理というものがどこまで通じるのか？というものだ。主人公は島の領主の娘アミーナ。

領主である父を「ミニオン」と呼ばれる魔術にかけられた人間に殺された彼女は、

東方からやってきた騎士のファルクとニコラと共に犯人を探す。読めば感じるはず。

「この作品はすごいぞ！」って。

![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\41YXCEXW6GL[1].jpg]()

『地球の水が危ない』

高橋裕　（岩波新書）

「水」その中でも淡水にスポットあてた新書。現在の水の状況は深刻であり、

そのことを実感させられる一冊。日本という島国ではなじみのない国際河川についての章では、

淡水問題の解決の難しさがよくわかる。一番印象に残っているのは、

「厄介なのは、益か害かが地域により、あるいはそれぞれの立場により、

あるいは時代によって異なる点である」という言葉だ。